

第1B(中) 分科会 教育課程に関する課題

提案主題 小中が連携した円滑な教育課程の実施に向けた教頭の役割

協議の柱 小中が連携した教育課程の推進に向けた体制づくりを構築するための教頭の役割とは

提言者 日田市立大山中学校 森 清 隆

1 質 疑

- (1) Q 連携の壁となる小中の文化の違い等を、クリアするための工夫が他にもあるか。
A 開校当時は校内研修に対する意識の差があったように聞いている。合同校内研修を年に数回行うが、研修に対する意識のレベルを上げることで改善されてきており、壁を感じなくなってきた。
Q 合同行事を小中それぞれで開催していこうという動きはないのか
A 一貫校として合同行事に拘るあまり、無理したところがあるように感じる。行事については、合同・単独を再検討していく時期だと思う。

2 協 議

- (1) 連携を進めるうえで参考となる事例
- ・ 小中それぞれの学習内容の把握と無駄な重なりを解消するために、各教科で9年間の系統表を作成している。
 - ・ 月に1回、中学校単位で校区内の小・中学校教員で分科会を持ち、テーマ学習や交流会を行うことで連携を図っている。その際、常に校区内の教頭で連絡を取り合い、スムーズな運営を心掛けている。
 - ・ 小中学校で教職員の認識の違いは大きいですが、管理職のリーダーシップが教育課程の連携に見通しが持てる原動力となった。
 - ・ 教頭として関わり方が難しい面もあるが、担当者同士が話し合いを持ちやすいようにスケジュール調整を行っている。
- (2) 連携を進めるうえでの課題
- ・ 連携を進める上で、一貫校と連携校では生じる課題が違ってくる。
 - ・ 合同会議について、内容や時間の確保などを教頭として企画していく必要がある。

3 指導助言

- (1) 校種を超えて連携していくのは難しいが、教職員をつなぎ、学校と保護者・地域をつなぐ要となる役割を担っているのが教頭職である。
- (2) チームとして機能させるための陣容づくりと、「何を」「何のために」「どこまで」やるのか目指すところをはっきりさせ、教職員の共通理解を図ることや、指導体制や指導方法などの差異を適度な段差にしていくための調整をしていくこと（折り合いをつけること）が重要である。